

見本版

平成19年度

京都産業大学附属中学校

入学試験模擬問題集



目次

平成19年度 入試模擬問題

■ 国語	1
■ 算数	13
■ 理科	19
■ 社会	33

国語

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

葉子は母葉々子と、公園の見える自宅マンションのベランダからさかあがりの練習を見る約束をかわし、父真一と家を出た。練習のいかあり、さかあがりを成功させた二人はレストランにやってきた。

「でもさあ、パパ、さかあがりつて、ほんとに、なんの役に立つわけ？」
「なんの役にも立たないよ」
「でしょ？ だったら、なんでやらなくちやいけないんだろ」
「わかんないな、パパにも」
「まあ、もうできちゃったから、べつにいいんだけど」

(①) 損な性格だ。大きくなってから、なにかと苦勞することになるだろう。

「でも、できなかったものができるようになるのつて、気持ちいいだろ」
「うん……まあ、べつにそんなでもなかったけど……」

いまはわからなくてもいい。おとなになれば、わかる。さかあがりが初めてできたときのよくな「やったあー」と叫びたくなる喜びや感動に、この子はこれから何度出会えるだろう。たくさん出会ってほしいから、来週の日曜日は〈どび箱の神様〉になってやろう、と決めた。

「さっきの男の子、ケイスケくんつて言うんだつて、あいつなんかスポーツ^②バンノウなんだろうな」

「そうでもないよ。足は速いんだけどね、鉄棒とか^③苦手なの」

「なんだ、じゃあ、いっしょに練習すればよかったのに」

「げーっ」

葉子は大げさに顔をしかめ、ケイスケがいか^④生意気で乱暴者で勉強ができなくてカッコ悪くて女子に嫌われているかを、むきになってまくしたてた。

真一はそれを苦笑いでいなして、「だけどさあ」とからかう顔と声で言った。「おまえ、さっきパパを呼ばなかっただろ。そんなに嫌^⑤なやつだったら、パパ、ぶんなくつてやつてもよかったのになあ」

「だつて……かわいそうじゃん、パパ呼ぶと」

声がかくぐもつた。真一が「なんで？」ときくと、ほとんど息だけの早口で「ケイスケつてお父さんいないの。幼稚園の頃、離婚^⑥しちゃったんだつて」と言う。

「離婚」という言葉が、くつきりと耳に届いた。^⑦聞きかじりではない。ちゃんと意味がわかっていて、世の中にはそんなこともあるんだと受け入れている。それがいいのが悪いのかはわからないが、「葉子つて、あなたが思つてるのより、ずーつとおとななんだから」と葉々子が言つていたのは、こういうところなのだろう。

「みんな、ケイスケの前でお父さんの話とかしないようにしようねつて、約束してるの。かわいそうだもん」

真一はテーブルに身を乗り出して葉子の頭をなでながら、「パパは、かわいそうつていうの

は違ちがうと思うけどな」と言った。

「そう?」

「うん、ちよつとな、ちよつとだけ違ちがうんだよ」

そのことがわかる女の子に背そむつてほしい、と思う。

『デニーズ』に向かうときも、パフエを食べているときも、「最後にもう一回だけ練習して帰ろうか」と公園こうえんに戻る間もずっと、葉子は葉々子との約束のことを一言も口にしなかった。

⑧ 忘れたわすれりりをしている。だから、歩きながらつめをかむ。もう深ふかづめづめになつてはいるはずなのに、まだ何本か⑨ ニエウシの残る小さなはをカチカチとせわしなく動かしていく。

公園の入り口まであと少しというところで、真一は足を止めた。

「そっか、パパ、忘れてたよ、ごめんごめん」

いま思おもいだしたような口調になつてくれただろうか。

「ママに言いわれてたんだ、葉子がさかあがりできるようになつたら、すぐ電話してくれつて。いまからやるよつて電話したら、そのときだけベランダに出ればいいんだから、つて。⑩ ぜんぜん忘わすれてた、いやあ、まいったなあ」

何歩か先に進んでいた葉子も立ち止まった。だが、真一を振り向くしぐさは、いかにも気乗りき乗りのしない様子ようすだった。

「門のところに電話ボックスあるだろ、パパ、電話してくるから、葉子は鉄棒のところに行つてろよ」

「そんなのしなくていいつてば、⑪ べつに関係ないもん、ママとか」

「だいじょうぶだよ、さつきもあんなにうまくやれたんだから。成功したところ見せてやれよ。ママ、びつくりするぞ」

葉子はうんざりしたように肩かたを落おとした。

「あのね、パパ知らないと思うけど、電話かけても通じないんだよ」

「なんで?ママいるだろ、部屋へやに」

「タカくんがお昼寝ひるねしてるときは、ずーっと留守番電話くすわんでんわになつてて、ベルも鳴らないようにしてるの。そうしないとタカくん、すぐ起きちやうんだもん」

真一は言葉につまった。とつさに「まあさうとしたが、あせればあせるほど胸むねがつつかえてしまう。

⑫ 父親ちちの困惑こんわくと後悔こうかいを見ぬいたのか、葉子はそっぽを向いて、あーあ、と息をついた。

「だからさあ、タカくんがお昼寝ひるねしてるよ、友だちから電話かかってきてもわかんないんだもん。もう、サイテー、ちよーむかつく」

言葉づかいは荒あれてはいたが、口調は乱暴らんぼうになりきれない。つまらない嘘うそも、なんとか許ゆるしてくれたようだ。

真一は葉子に歩み寄よつて、肩かたに掌てのひらを置おいた。

⑬ 「ごめんな」でも「ありがとう」でもない言葉を言いつてやりたかった。

「パパも、ちよーむかついちゃったよ」

ちよつと違ちがう——とわかっていたが、とりあえず、つづけた。

「いまはタカくんも赤あかちゃんだからあれだけど、もうちよつと大きくなつたら、パパが思い

つきり鍛えてやるからな。ほんとだぞ、ビシビシ鍛えて、それできようだいゲンカとかしたら、パパゼーつたいに葉子の味方になってやるから」

葉子はくすぐったそうに身をよじって真一の掌をはずし、「ねえ」と甘えた声を出した。「いいことつていうか、ほんとのこと教えてあげよつか」

「なにが？」

「あのね、さつきパパ言ってたじゃん、『負けるもんか！』と『大っ嫌い！』ってケイスケのこと考えながら、さかあがりやってみるって」

「ああ。だから、うまくいったんだよ」

「でもね、あたし、ケイスケのこと考えてなかったの」うつむいて、頭を真一のおなかにこすりつける。「『大っ嫌い！』って……ほんととはね……ほんととは……」

真一は葉子の頭を両手で抱いた。^⑫ つづく言葉を言わせたくない。

かわりに、聞かせたい言葉がある。やっと見つけられた。拍子ぬけするほど簡単な言葉だった。

「パパもママも、葉子のことが大好きだからな。ずーっと、だいだいだい、だーい好きだからな」

真一の腕とおなかに挟まれた葉子の頭が、窮屈そうに小さく、けれど確かに、何度か縦に動いた。

義父のことを、思う。

「おまえのことが大好きだ」と口に出して言えるようなひとではなかった。無口でぶつきらぼうなひとの背中から思いを感じ取るには、真一も幼すぎた。

いまなら——わかる。

^⑬ 子供が寂しいときは、親だつて寂しい。

それがやるとわかる歳になった。

葉子を強く抱きしめた。小さく、あたたかく、やわらかい我が子の体と心がいとおしくてたまらない。抱きしめられているのは自分のほうかもしれない、そんな気も、した。

先に立って公園に入った葉子は、門をくぐったところで不意に足を止めた。

「やだあ、なんで？」

鉄棒には先客がいた。ケイスケが、さつきの葉子と同じように一人でさかあがりを練習していたのだ。

けり上げる脚は、惜しいところまで来ている。あともうちよつと尻が上がればいいのだが、そこがうまくいかない。

「しよーがないなあ、ぜんぜんできないじゃん、あいつ」

葉子は余裕たつぷりに言う。「おまえだつて、さつきはもつとひどかったんだぞ」と真一が言つても、「さつきはさつき、いまはいま」と胸を^⑭ 八つて返す。いい気なものだ。

ケイスケは、自分なりに作戦を立てたのだらう、助走をつけて鉄棒につかまり、その勢いで地面をけろうとした。だが、助走のスピードに鉄棒をつかむ手の力が追いつかず、バンザイのポーズで尻もちをついてしまう。

